

地 域 再 生 計 画

1 地域再生計画の申請主体の名称

上勝町

2 地域再生計画の名称

バイオマス活用によるエコバレー計画

3 地域再生の取組を進めようとする期間

始期 計画が認められた日

期間 約3年

4 地域再生計画の意義及び目標

上勝町は、霊峰剣山を含む四国山脈の東端に位置し、標高 1,000m級の山並みと急峻なV字谷に囲まれた美しい山村で、標高 100m～700mの間に大小 55 集落を有する町である。人口は昭和 30 年の町村合併当時の 6,265 人から平成 12 年には 2,124 人と減少を続ける過疎地で、高齢化比率は平成 12 年で 44.1%と高い。こうした現状から町内産業も軽薄短小産業へと特化し、以前は重厚長大産業の代表と言われる木材や温州ミカンなどの生産に携わっていた農林業者が、現在では料理の妻物として木の葉っぱや季節の花を集めて出荷する“いもどり”生産、またオガクズを固めて椎茸生産をする菌床椎茸栽培などに経営の中心が移っており、「楽しく綺麗な農業」にシフトされている。農林業の軽薄短小化が進んだことで高齢者でも容易に就業することが可能になり、高齢者にも高額収入の道が開かれているとマスコミが報道し、「80歳で年金プラス500万円を稼ぐオバアちゃんたち」が有名タレントに早変わりした。こうしたことを受けて上勝町で老後を過ごしたいと希望する人が増えている。

また、ごみの35品目分別を始めたことでごみ処理における先進自治体としての評価が高まり、「生ごみ処理機を全戸設置した町」、「ゴミ収集車が走らない町」、「環境教育が進む町」、「ボランティアによるゴミ収集が進む山村」、等々の表現でマスコミ取材が続いている。平成 15 年 9 月 19 日に行った「ゼロウェイスト宣言」によって環境の町としての評価が高まり、視察や取材が増えている。この宣言は、西暦 2020 年までにゴミ処理における脱焼却、脱埋立を謳っており、未来の子どもたちに対して良い環境を引き継いでゆこうとする呼掛けである。

一方、「町づくりは人づくり」としてあらゆる機会を捉えて人づくりを進める“いっきゅう塾”、町内5地区の代表選手が町づくりを競う「いっきゅう運動会」等の活動は、効果を上げており、その活動の中から生まれたのが「地域まるごと農村公園化構想」等の計画であって、エコツーリズム等に取り組む礎となり、「上勝町有償ボランティア輸送特区」や「上勝町まるごとエコツー特区」という特区推進の原動力になってきた。特に、人口2,200人の町にあって地域を守るための活発なボランティア活動は有名であり、社会福祉協議会への登録ボランティアが11グループ(576人)と住民4人に1人が取り組んでおり、四国遍路における“お接待”に見られるように、他国からの訪問者を暖かくもてなす風習は今も生きている。

こうした“人”による社会環境が良い意味で残されていることは裏腹に、山林所有者の高齢化が進んだことによって森林の荒廃を防止する必要性が深刻になっている。このことは東南海地震と並立する重要な災害防止対策に位置付けられ、住民の中からも自然環境の悪化を懸念する声が生まれているだけに、行政としてもゼロウェイストと平行した環境政策として森林の荒廃を防止する若い労働力の確保を柱に取組む構えである。

また、現在の視察観光で増加した来町者による町経済への貢献は大きく、従来の環境に配慮した取り組みを崩すことなく、更に発展させる形で新しいバイオ技術の取得を進めるために産官学が一体となって、町の唯一の大規模資源である森林資源を活用すべくエコバレー計画を作成し、幅広い手段をもって地域経済の活性化と地域雇用の創造を図りながら、地球温暖化の防止と地域の継続した発展を実現させることを目標とする。

具体的には、ヨーロッパにおいてバイオマス、特に木質バイオマスの活用が始まって久しいが、この間には日本においても家畜を始めとした様々な農林業廃棄物を中心としたバイオマスの活用試験が進められてきたものの、現在まであまり芳しい結果は報告されなかった。バブル崩壊を機に、従来の経済活動への反省が生まれ、「地産地消」、「スローフード」、「癒し」といった言葉が育ち、「リゾートホテル」から「グリーンツーリズム」や「エコツーリズム」等に移り、のんびりと田舎体験を取り入れた民宿が大流行している昨今である。当初は観光農業への取り組みが実験的に行われていたが、いつの間にか静かなブームとして全国に波及しているのが実態で、農家を中心とした庭先の簡易な施設と農業体験等によって癒しを求める都市住民に受け入れられてきた。こうした流れの中で、農村や山村の凜として厳しい自然環境や美しい景観を中心に据えて心から落ち着くことができ、日常から開放される爽快感を味わう間伐や下草刈といった林業体験、棚田の田植えや稲刈りを中心に竹の子掘りや椎茸採り、芋堀やミカン狩りといった農作業体験によって本当の自然に直接触れることができ、母なる地球を心から堪能できる手作りの観光を売り物にした観光農園が本町でも動き始めており、一部では小集落における集会所を活用した都市と農村の交流事業も始まった。こうした住民の自主的な活動を行政が更に一步進めるものとしてバイオマス活用計画を推進し、バックアップすることでその活動を確実に定着させることを目指すものであり、中心となる施設として月ヶ谷温泉村都市農村交流センター等の施設整備も重要な要素になると期待される。

また、農家数の減少や後継者不足によって農林業従事者の高齢化が進行して生産性が減退しており、生産基盤である農地の減少や森林の荒廃が課題となっていることから、地域の大切な棚田の景観や整然と管理された森林風景を残してゆくための取組みとして、森林農地管理基金を造成して農林地管理士の育成確保を進める等によって、若い労働者の雇用創出を図る。

更に、エコバレー計画ではNPO法人ゼロウェイストアカデミー（仮称）を設立し、環境に関する情報の国際化を推進して国際シンポジウムを開催する等の取組みによって、新たなビジネスチャンスを創出し、住民の意識をより環境に配慮したものにすると共に若い労働力の定住意欲が一段と加速されることを期待する。

5 地域再生計画の実施が地域に及ぼす経済的社会的効果

期待される経済的社会的効果

○ 新規雇用

- ・ NPO 設立や農林業管理士などの職場確保、更にはバイオマスの原料となる間伐材の伐出作業従事者の雇用創出効果やその活動を裏から支える間接的な雇用が確保される。また、これらの家族も違った形で職場の確保が進むものと期待される。

	現 在	17 年目標	21 年目標
直接的な職場確保等の件数	3 件	5 件	1 0 件
間接的な雇用確保等の件数	0 件	5 件	2 0 件

○ 観光客の増加

- ・ 地域の魅力が向上するため交流人口の増加が期待される。

	14 年実績	17 年目標	21 年目標
宿泊客数	9,495 人	10,500 人	13,000 人
日帰り客数	159,033 人	175,000 人	210,000 人

○ 農林業所得の向上

- ・ バイオマス利用による森林資源の販路拡大、農業生産物出荷量の増加等から、農家所得の増加向上効果が期待できる。

	13 年実績	17 年目標	21 年目標
町内純生産	2,111 百万円	2,200 百万円	2,350 百万円
農家 1 戸当りの所得	2,325 千円	2,676 千円	3,252 千円

○ 町内事業所における化石燃料使用量の削減

- ・ 本町の産業である都市農村交流センター月ヶ谷温泉では下表のように燃料を使用しており、本事業を実施することでこれら化石燃料を木質バイオマスエネルギーに代替することが可能で、二酸化炭素排出削減になり、地球温暖化防止に寄与することができる。

現在の町内事業所における化石燃料使用量

	ガソリン	灯 油	軽 油	A 重 油	混 合 油
もくさん	3,480	28,186	6,306		45
月ヶ谷温泉	152	798	8,400	144,100	
上勝バイオ	2,989	734	341	299	
椎茸ハウス		285,690			
合 計	6,621	315,408	15,047	144,399	45

二酸化炭素排出削減量の算出

		a .化石エネルギー消費量 (kl)	b . CO2 排出係数 (kg-CO2 / kl)	c . 排出量 (kg-CO2) a × b
月ヶ谷温泉	A 重油	210	2,698	566,580
椎茸栽培ハウス	灯 油	286	2,528	723,008
合 計				1,289,588

以上のように 1,289,588 kg-CO2 の二酸化炭素排出削減効果がある。

6 講じようとする支援措置の番号及び名称

(213001)環境と経済の好循環のまちづくりに対する支援

(213004)エコツーリズムに対する支援

(230003)バイオマスタウンの実現に向けた取り組み支援

7 構造改革特区の規制の特例措置により実施する取組その他の関連する事業

平成不況は山村にも及び、都市圏から疎開した人達をも含めて住民に厳しい蔭を落としている。特に、中高齢者の失業者が増加しており、雇用創出と地域の雇用総数の確保要求に応える手段の一つがバイオマスを活用した温泉周辺再生計画の推進である。今回の地域再生計画の実施によって、人の動きと合わせて物の動きも活性化することが期待され、小売商店等の売上額の増加にもつながると予想される。更に、地産地消を推進することで新しい特産品の開発意欲が芽生えると共に、農林産物等の生産活動の活発化と生産額の増加も期待される。

一方で、高齢者等の働く意欲の喚起にもつながり、身近に入り込みの客が入ることによって緊張感が生まれ、生活に生き甲斐が生まれ、日常生活にリズムと張りを持たせるという効果が期待される。

更に生活環境において、自分たちには我慢できることであったとしても観光客等の利便や満足感を確保することが必要であり、幅広い意味での改善を進めることで更なる利用者の増加が予想され、その結果として雇用機会が発生することにつながり、この雇用がいわゆる『バブル崩壊後続いてきた“まち倒し”の悪循環』を断ち切る決め手となる。

8 その他の地域再生計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項

今後必要となってくる事項は十分煮詰めたものとは成り得ていないが、地域経済を活性化する手段として少しでも経済循環に閉鎖性を持たせる手法が必要で、早い時期に地域通貨の導入が必要であると考えている。

別紙 支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容、支援措置を受けようとする者及び支援措置を講じようとする日

別紙

1 支援措置の番号及び名称

(№213001) 環境と経済の好循環のまちづくりに対する支援

2 当該支援措置を受けようとする者

上勝町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

ゼロウェイストアカデミー事業

これからの事業展開の母体となる NPO 法人ゼロウェイストアカデミーの設立に向けて調査研究し、その立上げを図る。

- a . ゴミの組成調査と経年変化調査
- b . ゼロウェイストアイデアの募集
- c . 国際シンポジウム、国際フォーラム等の開催
- d . 環境カリスマ養成塾の開設
- e . その他、地球環境に寄与するための事業

温泉等のボイラーを木質燃料ボイラーに切り替える試験と事業

上勝町ではゴミの焼却炉を設置せず、ゴミの焼却という考えからの脱却を図るため、資源化によって焼却・埋立ゴミを無くするゼロウェイストを掲げ、住民・行政・事業所などが一体となって温暖化防止、ゴミのリサイクルに取組み、現在、ゴミを35品目に分別して収集している。その結果、1998年に136tあった焼却ゴミが2002年には60tと半分以下になった。一方で、焼却ゴミが減少した分、資源として再生されるゴミが165tから229tに増え、ゴミの総量290tの79%が再資源化されるなど、二酸化炭素排出削減が進められている。この延長として、町内の主要産業である交流センター月ヶ谷温泉、等における化石燃料を木質バイオマス燃料の活用により切り替える事で地球温暖化防止に寄与する道を探る。

森林農地管理士確保育成事業

上勝町には水源涵養と水質の浄化作用を持つ棚田が多く残り、上勝の棚田群と呼ばれて愛されているが、作業効率が非常に悪い上に農業者の高齢化が進んでおり、ともすれば荒廃しかねない状況にあり、近年「棚田を考える会」の設立による棚田保存の気運が高まっている。更に、森林農地の荒廃化を防止するため、森林農地適正管理条例の施行と森林農地管理士の育成により、空気の浄化作用がある森林と、水の浄化作用がある農地を適性に管理すべく取組みを進める。

別紙

1 支援措置の番号及び名称

(No213004)エコツーリズムに対する支援

2 当該支援措置を受けようとする者

上勝町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

先進的な取組みに関する情報提供を受けつつ、上勝町が地域住民や 1Q 運動会などの協力を得ながらエコツーリズムを推進する。

ゼロウェイストアカデミー事業

エコツーリズムを含めた環境体験などの事業展開において母体となる「NPO 法人ゼロウェイストアカデミー」の設立に向けて調査研究し、その立上げを図ると共に活動を支援してゆく。

上勝町まるごとエコツアー特区の展開

構造改革特区第 4 次認定された「上勝町まるごとエコツアー特区」については、上勝町の豊かな自然環境と棚田群を中心とした活動を中心に展開する計画であり、地域住民や 1Q 運動会などの協力を得ながら推進する。

エコツーリズムで必要なソフト(受け入れ体制)の整備充実

- a. 地域協定づくり
- b. マップ作成 (ポイントやサイン・いわれ・問い合わせ先など、年間の気候・行事・自然の移り変わり・食べ物などの情報も盛り込む)
- c. 案内人の養成
- d. ポイントづくり
- e. 情報収集発信
- f. 案内交通手段の確保

別紙

1 支援措置の番号及び名称

(№230003) バイオマスタウンの実現に向けた取り組み支援

2 当該支援措置を受けようとする者

上勝町

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

「バイオマス情報ヘッドクォーター」で提供される先進事例や技術情報等を活用しながら、以下の事業を推進していく。

温泉等のボイラーを木質燃料ボイラーに切り替える試験と事業

上勝町ではゴミの資源化によって焼却処理からの脱却を図るため、ゼロウェイストを掲げており、住民・行政・事業所などが一体となって温暖化防止、ゴミの35品目分別を進めている。その結果、ゴミの79%が再資源化されるなど、CO2排出削減が進められている。この延長として、町内の主要産業である交流センター月ヶ谷温泉、椎茸や果樹等の温室ビニールハウス等における化石燃料を木質バイオマス燃料の活用に切り替える事で地球温暖化防止に寄与する道を探る。

また、その他にも利用可能なバイオマスが豊富に存在すると言われており、これらについても効率的に有効活用できるように手法を検討してゆく。

ゼロウェイストアカデミー事業

これからの事業展開の母体となるNPO法人ゼロウェイストアカデミーの設立に向けて調査研究し、その立上げを図る。

- a．ゴミの組成調査と経年変化調査
- b．ゼロウェイストアイデアの募集
- c．国際シンポジウム、国際フォーラム等の開催
- d．環境カリスマ養成塾の開設
- e．その他、地球環境に寄与するための事業

林農地管理士確保育成事業

本町には水源涵養と水質浄化作用を持つ棚田が多く残り、『上勝の棚田群』と呼ばれ愛されているものの、作業効率が悪い上に農業者の高齢化が進み、荒廃の瀬戸際に立たされている。近年「棚田を考える会」の設立により棚田保存の気運が高まっている。

更に、荒廃防止のために森林農地適正管理条例の施行と森林農地管理士の育成により、空気の浄化作用がある森林と水の浄化作用がある農地を適性に管理すべく取組みを進める計画である。